

狐崎 II 遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

1989.6

岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.

序 文

宮古市には、私たちの先人たちによって残された数多くの貴重な文化遺産が存在しています。特に、埋蔵文化財については、約400ヶ所もの遺跡が知られています。そして、現代社会に生きる私たちは、この様な貴重な文化遺産を更に、将来における文化の向上の基礎として守り伝えていかなければならないと考えております。

しかし、一方では、道路網の整備や宅地造成などの種々の開発事業も、現代社会の必然的な要請でもあります。これらの開発と貴重な文化財の保護、保存の均衡をはかるということは、当市においても直面する重要な課題となっています。

本報告書は、宅地造成工事によって消滅することとなった、泉町狐崎II遺跡の昭和63年度の発掘調査の結果をまとめたものであります。

今回の調査の結果、平安時代の竪穴住居跡の外、尾根の最深部からは、縄文時代の竪穴住居跡や土壇群などの遺構が発見されました。当遺跡を含む、『長町・泉町・鴨崎遺跡群』では、はじめて縄文時代の遺構が確認され、当遺跡群内における各時代の遺跡の立地や在り方を考える上での貴重な資料を得ることができたと思っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書作成に際しては、陸中建設株式会社をはじめとする多くの方々の御協力を頂きましたことに深く感謝申し上げます。

平成元年6月

宮古市教育委員会

教育長 保坂純三

例 言

1. 本書は昭和63年度に実施した泉町狐崎II遺跡（可成り大規模）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会で、発掘調査および本書の執筆、編集は鎌田が担当し、高橋・盛合がこれを補佐した。
3. 調査座標は平面直角座標第X系を座標変換して使用した。
4. 高さは標高値をそのまま使用した。
5. 土層図の層相観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1967）を参考とした。
6. 出土した遺物、実測図、写真などは、すべて一括して宮古市教育委員会で保管、管理を行っている。
7. 本遺跡関係文献には次のものがある。（宮古市教育委員会刊行）
 - 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲、熊谷常正 1979
 - 『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』 武田将男 1983～86
 - 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 1986
 - 『崎山遺跡群 I～III』 高橋憲太郎 1987～89
 - 『青猿I遺跡、下在家II遺跡、千徳城遺跡群』 高橋憲太郎、鎌田祐二 1988
 - 『崎山トロノ木I遺跡発掘調査報告書』 高橋憲太郎 1989
8. 発掘調査に際しては、昭和57年度に調査を実施、担当した武田将男氏（宮古市教育委員会）より御指導・御教示を頂いた。
9. 本書は、陸中建設株式会社の多大なる御理解、御協力のもとに刊行する事が出来たことを記す。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	1
4. 遺跡の概要	2
II 調査内容	8
1. 遺構・遺物の検出状況	8
2. 検出された遺構・遺物	8～27
III 調査のまとめ	28

写真図版目次

- 第1図版 調査区景観、調査区(1)
- 第2図版 調査区(2)、調査区(3)
- 第3図版 第1号竪穴住居跡、第1号竪穴住居跡埋襲
- 第4図版 第1号竪穴住居跡埋襲断面、第1号竪穴住居跡炉跡
- 第5図版 第2号竪穴状遺構、第3号竪穴状遺構
- 第6図版 18号土壇跡、18号土壇跡断面
- 第7図版 13号土壇跡、溝状遺構
- 第8図版 R A 03竪穴住居跡、R A 03竪穴住居跡断面
- 第9図版 R A 03竪穴住居跡カマド煙道、R A 03竪穴住居跡カマド煙道土器出土状況
- 第10図版 R A 03竪穴住居跡出土土器、第1号竪穴住居跡埋襲土器

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	地形分類図	4
第3図	周辺の遺跡	5・6
第4図	全体図	7
第5図	第1号竪穴住居跡	10
第6図	第2号竪穴状遺構	11
第7図	第3号竪穴状遺構	12
第8図	1号～4号土壇跡	17
第9図	5・6号土壇跡	18
第10図	7号～9号土壇跡	19
第11図	20号・10号土壇跡	20
第12図	11号・12号土壇跡	21
第13図	13号～15号土壇跡	22
第14図	16号・17号土壇跡	22
第15図	18号土壇跡	23
第16図	19号土壇跡	23
第17図	R A 03竪穴住居跡出土土器	24
第18図	R A 03竪穴住居跡	25
第19図	R A 03竪穴住居跡カマド	26
第20図	溝状遺構	27

I 調査経過

1. 調査に至る経過

宮古市内には現在のところ約 400ヶ所余もの遺跡が確認されている。それらは、『分布調査 1～4』及び遺跡台帳としての『分布図 86』にまとめられ来た。

近年、宮古市においても種々の開発計画が策定され実施されている。それに伴い、埋蔵文化財包蔵地である遺跡の多くが消滅の危機にさらされている。このような時代の趨勢、状況下において、宮古市教育委員会では文化財の保護と活用の立場から、開発側との事前協議を繰り返してできるだけ多くの遺跡を保存する様に努めて来たが、遺跡の保存が回避となった遺跡については、教育委員会が主体となり緊急発掘調査を実施してきた。

事前協議

緊急発掘調査

泉町狐崎Ⅱ遺跡は、宮古市大字山口第6地割泉町地内に所在し、宮古市遺跡コードL G23-0218、遺跡番号Iz-04として登録し周知されている遺跡である。当遺跡は、昭和56（1981）年にその一部を宅地造成工事に先立ち緊急発掘調査が実施されている。その結果、奈良時代、平安時代の竪穴住居跡と縄文時代後期の遺物包含層が検出されている（未報告）。

今回の調査は、前回に引き続き宅地造成工事を実施したいという届出が提出されたことから、宮古市教育委員会は、協議を行った結果、記録保存を前提とした調査の委託契約の協定を交わし昭和63（1988）年8月22日より緊急発掘調査を実施した。

2. 調査要旨

発掘調査は、昭和63（1988）年8月22日～10月25日まで実施した。調査対象面積は8569㎡。

〈検出遺構〉 縄文時代の竪穴住居跡1棟、竪穴遺構2棟、土坑跡20基、平安時代の竪穴住居跡の一部1棟（前回調査において調査区外に在った分）及び所属時期不明な溝状遺構1条を検出、精査した。

検出遺構

〈検出遺物〉 遺物の出土量は少なく、竪穴住居跡埋土や土坑跡埋土から縄文時代の土器片や平安時代の竪穴住居跡カマド煙道部から土師器の坏、甕片が若干出土した。

検出遺物

3. 調査体制

調査主体 宮古市教育委員会（教育長 小野寺聰（昭和64年1月退職）
" 保坂純三（平成元年4月着職））

調査協力 陸中建設株式会社（代表取締役 伊藤 清）

調査総括 社会教育課長 吉田昌義（平成元年4月人事異動により議会事務局長へ）
摂待保典（ " " 着任）

社会教育係長 小本 哲

調査担当 社会教育係主事 高橋憲太郎、鎌田祐二（主担当）、盛合義信

また、調査にあたっては、次の各位から多大なる御協力を頂いた。

〈発掘調査〉 村岡憲一、中居磯雄、木村博、古館友三、刈屋昭三、伊藤晴男、内藤勝弘、北村昭一、中村福右エ門、山本寛、館洞進、小林茂、古館はる、佐々木茂、吉田昭、阿部豊

〈整理作業〉 山野目崇子、八木由美子、村岡憲一

4. 遺跡の概要

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置する。岩手県の沿岸部は、早池峯山を最高点とする北上山地の山裾が海岸部にまで迫り、低地や平坦面が少ない。宮古市においても同様で、遺跡の多くは、河川によって形成された低地を取り囲む様に存在する丘陵部や起伏の小さい山地帯から続く山麓や緩斜面上に立地する。

津軽石断層帯

宮古市の地形は、南―北流し宮古湾に注ぐ津軽石川から宮古湾西縁沿いに走向する津軽石断層帯を境に、西部の中～小起伏山地帯及びその縁辺部に形成された丘陵帯と東部の重茂半島域に大きく2分される。更に、東―西流する閉伊川、津軽石川の河口及びその各支流域に形成された平坦部、低地に区分される。

各丘陵部はいずれも面積的には小さく、しかも小河川、沢などにより開析度が高いため、その平面形態は樹枝状を呈し複雑に入り組んだものとなっている。

泉町狐崎Ⅱ遺跡

泉町狐崎Ⅱ遺跡は、閉伊川によって南北に分断された千徳丘陵の北側の丘陵に立地する。この北側の丘陵も山口川、近内川などにより3分されるが、当遺跡はその中でも、半島状に突き出た中央部の丘陵上に立地し、周辺に存在する遺跡とともに長町・泉町・鴨崎遺跡群を形成しており、この遺跡群のほぼ中央部の北側に位置する。

青猿Ⅰ遺跡

青猿Ⅰ遺跡(Se-11)は、昭和62(1987)年度に緊急発掘調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡、鉄関連遺構、縄文時代の陥し穴遺構などを検出している(『青猿Ⅰ、下在家Ⅱ、堀合館87』に報告済)。

青猿Ⅱ遺跡

青猿Ⅱ遺跡(Se-09)は、昭和59(1984)年度に緊急発掘調査が実施され、尾根上に竪穴、土壇、竪穴住居跡を検出している(未報告)。

狐崎遺跡

狐崎遺跡(Ya-04)は、昭和60(1985)年度に試掘調査され縄文時代の遺物が出土している(未報告)。また、今年度は、4月より緊急発掘調査が実施されており平安時代の竪穴住居跡を検出している。

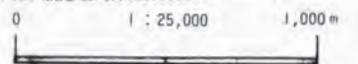
長根Ⅰ遺跡

長根Ⅰ遺跡(Se-08)は、昭和63(1988)年度に緊急発掘調査が岩手県埋蔵文化財センターによって実施され、終末期の群集墳が検出され藪手刀などの刀剣類、玉類、和同開珎などの副葬品なども出土しており学術的にも非常に注目された(今年度に報告書刊行予定)。

当遺跡群内の遺跡は、奈良～平安時代のものが多いが、縄文時代の土器片や弥生時代の土器を出土しているものもあり、縄文時代、弥生時代の竪穴住居跡などの遺構が発見される事は、十分予測できるものである。



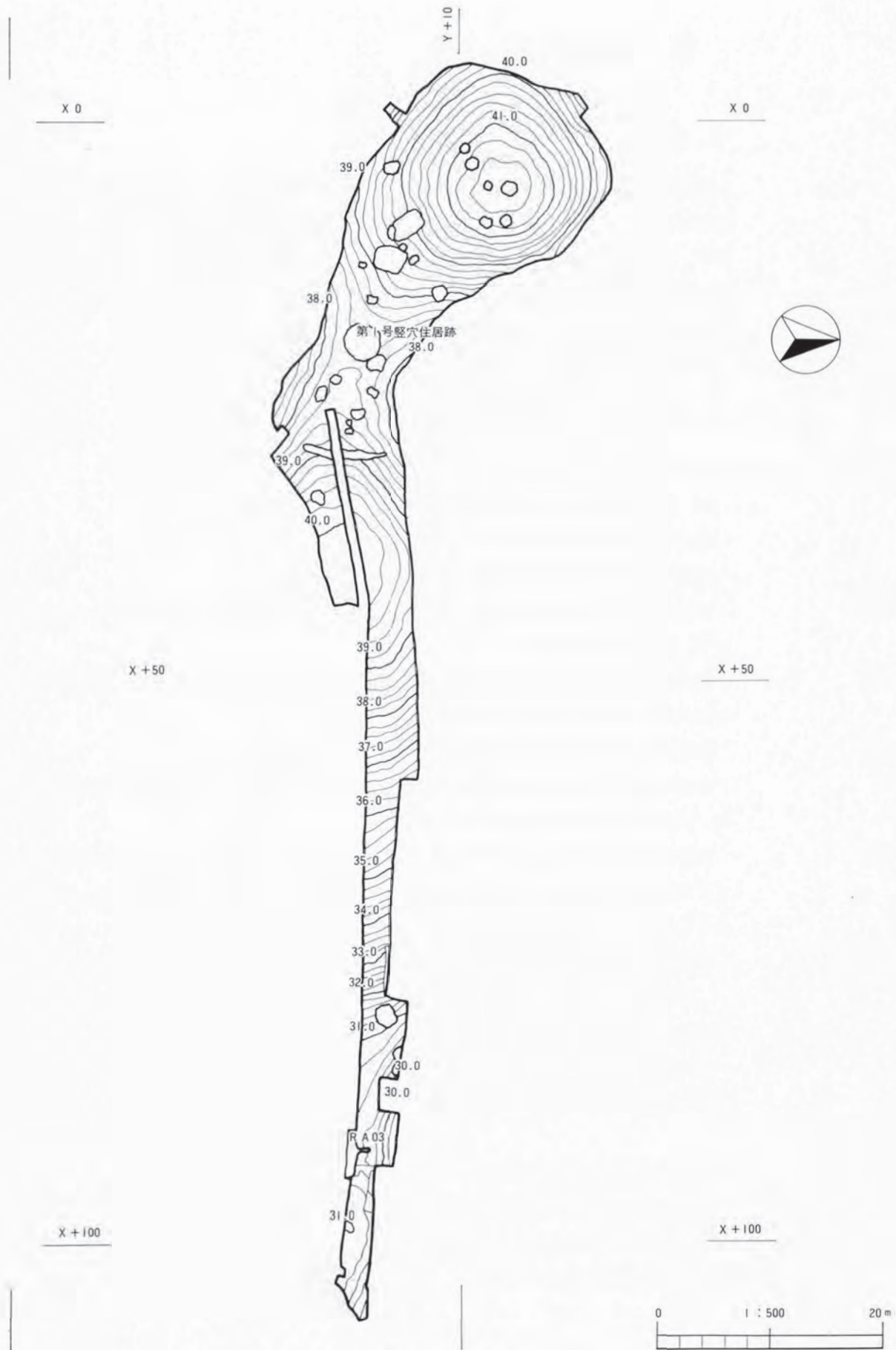
第1図 位置図





第2図 地形分類図





第4図 全体図

II 調査内容

1. 遺構・遺物の検出状況

調査対象区が、狭い尾根ということもあり表土層が薄く遺構・遺物は、表土層下の地山面で検出した。調査の対象となった尾根は、一番の高所と低所では約11mの比高差が有り階段状を呈す。遺構は、低所の方で平安時代の竪穴住居跡の一部（大半の部分は、昭和56（1981）年度調査時に精査されている。未報告。）、高所の方では縄文時代の竪穴住居跡や中～小規模の土壇跡が検出されている。

遺物の出土量自体は、全体的には多くない。

2. 検出された遺構・遺物

a 縄文時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡及び竪穴状遺構

第1号竪穴住居跡（第5図）

調査区内最高所下の幾分平坦となった部分に位置する。

規模

平面形は、ほぼ円形状を呈し、規模は直径3.20mをはかる。壁は床面からはほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.15mと浅い。

埋土

埋土は褐色砂質土を基本土とするA層から成る。黄褐色土を塊粒状に多く含み、炭化物粒子を混入する。埋土自体は固さはなくしまりもない。

床面

床面は地山面をそのまま利用している。平坦で比較的固くしまっている。

炉

炉は地床炉で、床面のほぼ中央部に1.3×0.85mの不整だ円形状の焼土の拡がり認められた。炉床は焼成を受け非常に固くしまっている。

柱穴

柱穴は壁沿いに巡るようにP₁～P₈まで存在する。すべて直径0.2m内外の円形プランを呈する小規模なもので、褐色砂質土を基本土とし暗褐色土、黄褐色土が混入する、やわらかくて全くしまりのない埋土が堆積する。

埋葬施設

北壁際には埋葬施設を検出した。土器は口縁部を上にした正位状態で埋められており、口径 cm、器高 cmをはかる単節斜縄文のみの粗製のもので、土圧によりすでに極小片になっており取り上げ後の復元はできなかった。

出土遺物は前述の埋葬土器の外にも若干量の縄文土器片が出土しているが、すべて単節の斜縄文を施文した極少片であった。

第2号竪穴状遺構（第5図）

調査区内最高所に至る斜面上に位置する。

平面形は長方形状を呈し、規模は2.70×2.25mをはかる。壁は床面からはほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁側で0.40mを残す。

埋土は褐色の砂質土を基本土とする層から成り、A₁、A₂層に細分される。A₁層は黒色土や暗褐色土、黄褐色土を塊粒状に混入する。炭化物粒や土器片を少量ながら含む。A₂層は、花崗岩が風化した真砂土塊を多量に混入する層で、やわらかくしまりがいい。炭化物粒を比較的多く含む、土器片を少量ながら包含する。

埋土

床面は地山の花崗岩を掘り込んだ面をそのまま使用しており、固くしまっている。床面上には炉などの施設は認められない。

床面

柱穴及びピットはP₁～P₅まで確認したが、P₃、P₄は当竪穴に伴うものか確認できなかった。P₁、P₂は直径0.25mほどの柱穴で、柱アタリの痕跡が認められた。

柱穴

遺物は埋土中より少量ながら出土した。

第3号竪穴状遺構（第7図）

第2号竪穴状遺構のすぐ南側に位置する。

第9号土壇跡と重複関係にあるが、これよりも古い時期のものである。

平面形は不整な長方形を呈するもので、規模は長軸で3.0m、短軸で2.0mをはかる。壁は斜面下方の東壁側が流出し確認できなかったが、ほぼ床面から直に近かく立ちあがる。壁高は西壁側で0.35mを残す。

規模

埋土はA、B、C層に大別される。A層は、黒色土を基本土とする層でわずかに黄褐色土を粒状に含む。やわらかく全くしまっていない。B層は、褐色の砂質土を基本土とし黒色土、黄褐色土を塊粒状に混入する。土器片を少量ながら含む。C層は、暗褐色土を基本土としC₁、C₂層に細分される。C₂層は壁際のみ堆積するもので、真砂土塊を多量に混入する。C₁層中には炭化物粒を比較的多く含まれる。

埋土

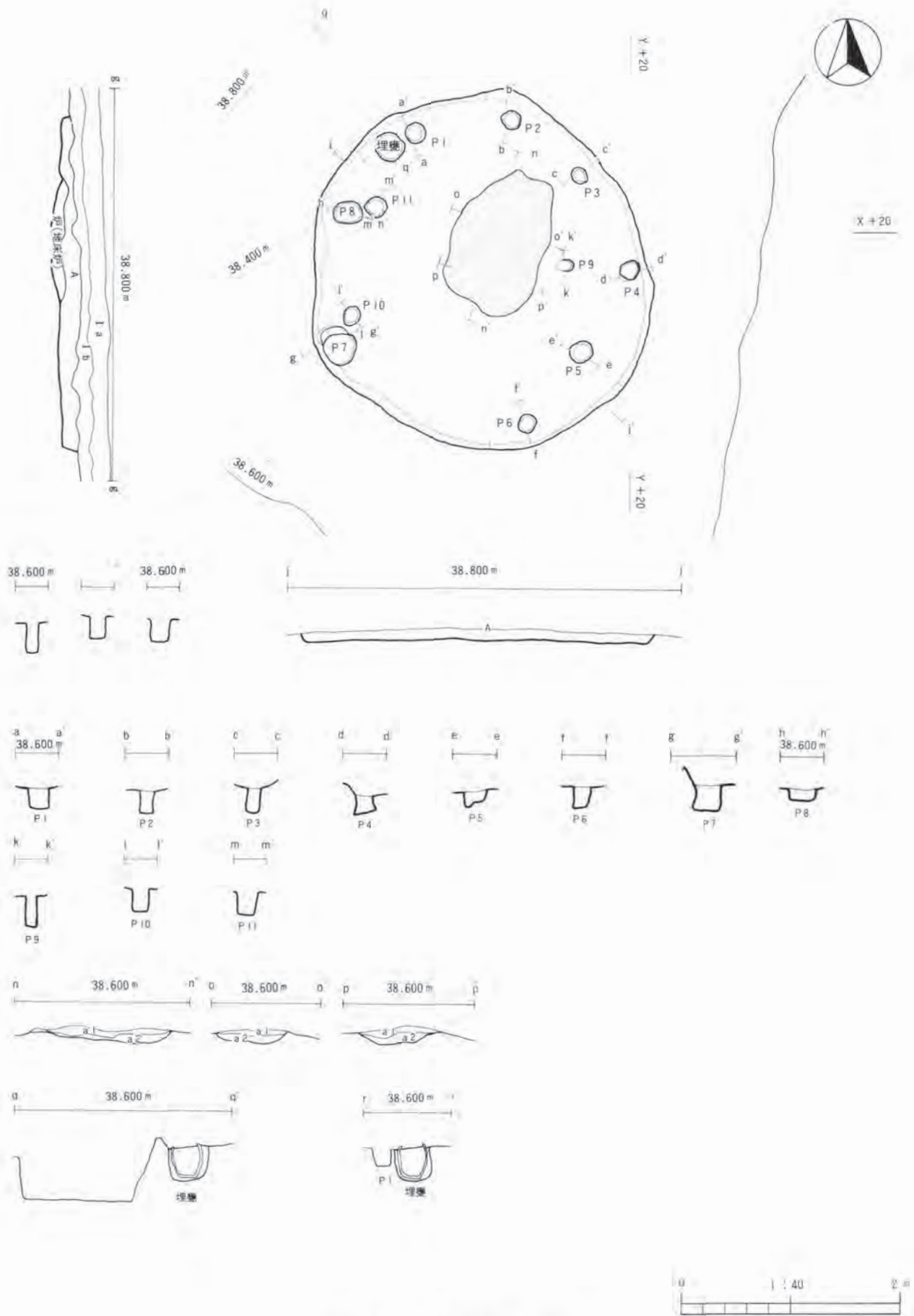
床面は斜面なりに若干傾斜が認められるが、ほぼ平坦で地山面をそのまま使用し比較的固くしまっている。床面上には、炉などの施設は認められない。

床面

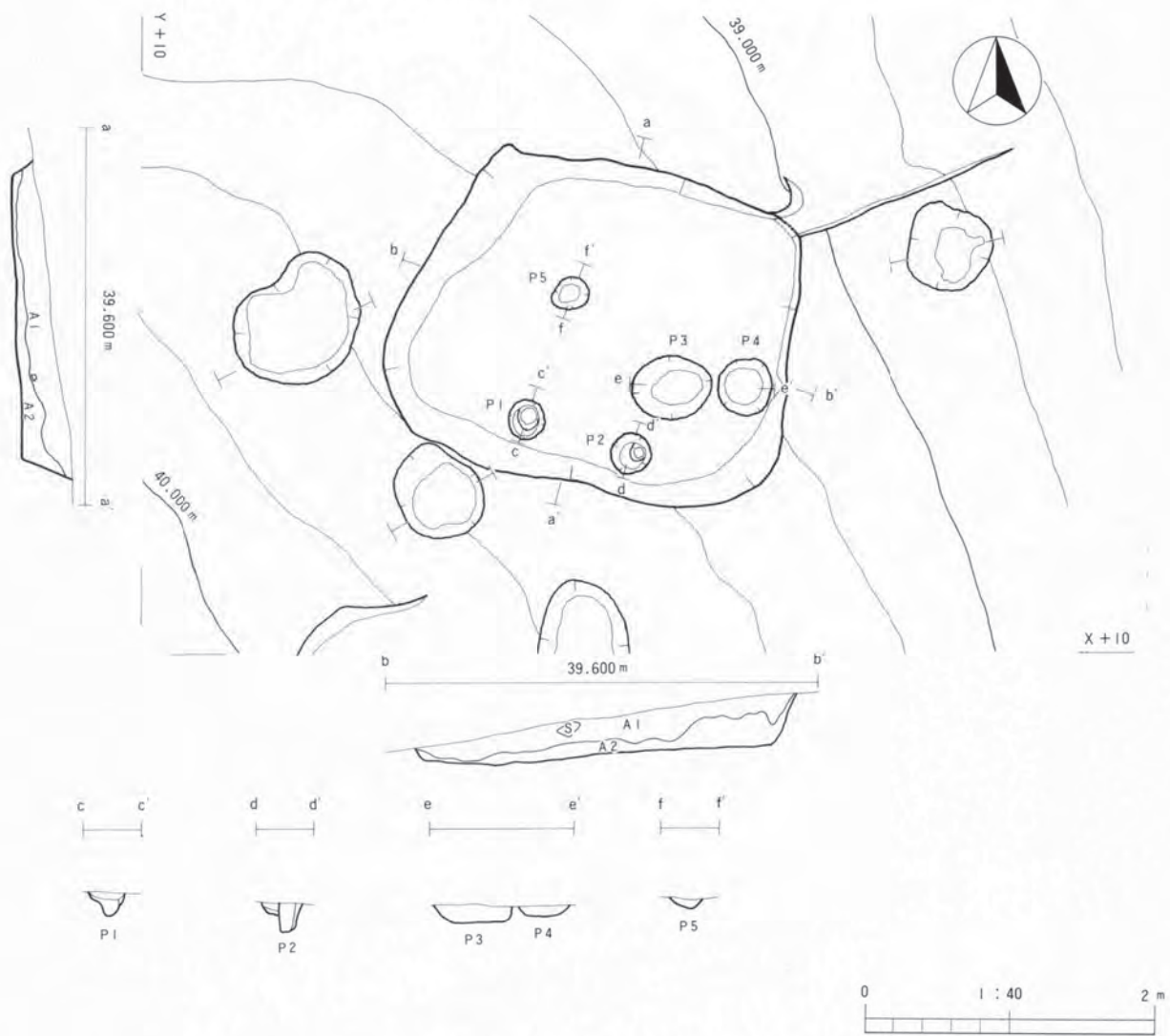
柱穴及びピットは、西壁側にP₁、P₂の2ヶ所を確認した。どちらも直径0.2mほどの円形の小規模なものである。床面からの深さはP₁、P₂とも0.15mほどである。

柱穴

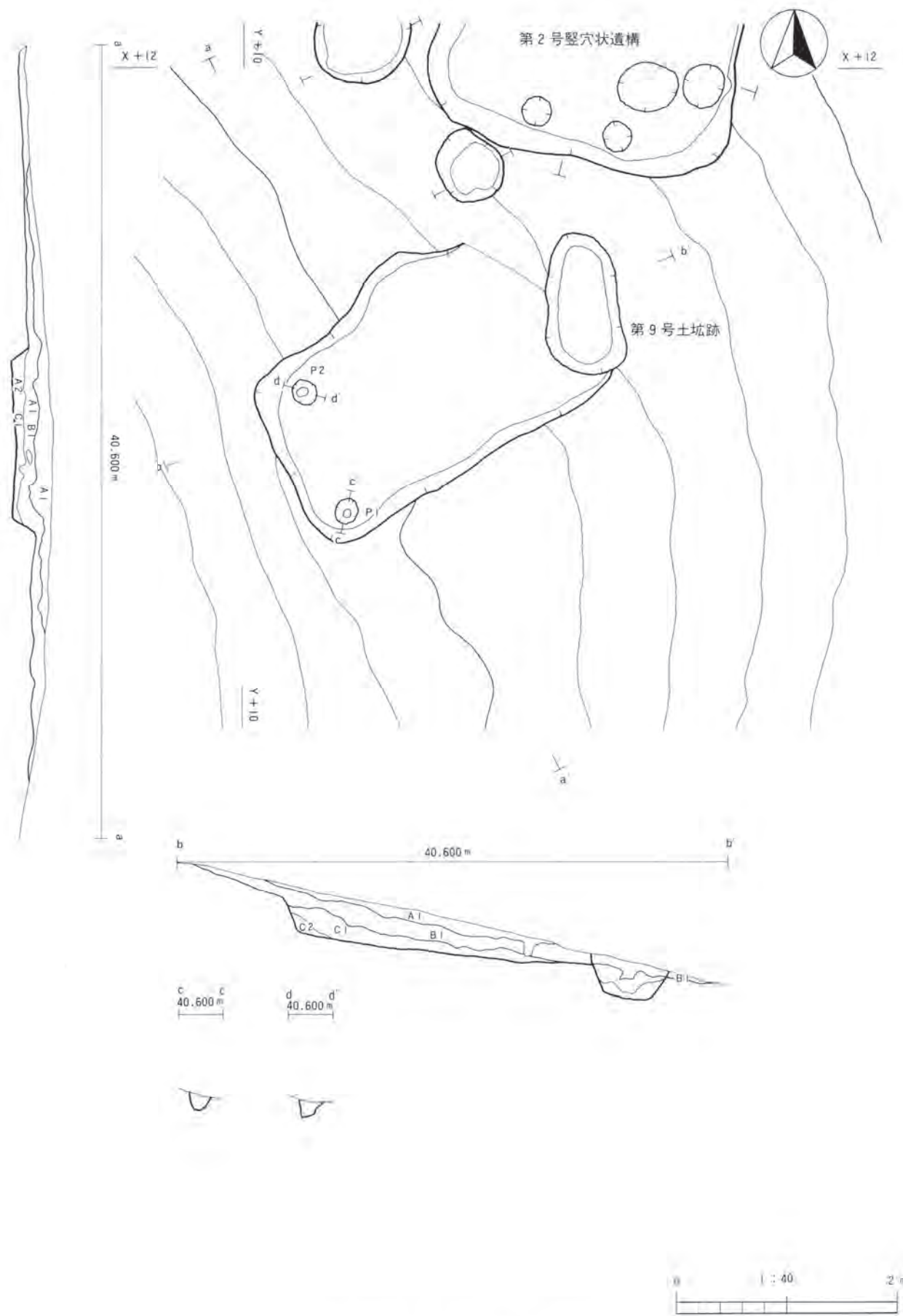
遺物は埋土中より少量ながら出土した。すべて縄文時代の土器片である。



第5图 第1号竖穴住居跡



第6図 第2号竖穴状遺構



第7図 第3号竖穴状遺構

(3) 土壇跡

1号土壇跡 (第8図)

1.1×1.0m、深さ 0.3mをはかる楕円形プランを呈す。壁は幾分傾斜しながら立ちあがる。規模
底面はほぼ平坦。埋土はA層から成り、A₁～A₃層に細分される。A₁層は黒褐色土を基本土と埋土
しやわらかくしまっていない。A₂層は黒色土を基本土とし黄褐色土塊や炭化物粒子を少量含む。
軟らかくしまりなし。A₃層は、やや明るい黒褐色土を基本土とし黄褐色土塊を比較的多く混入
する。軟らかくしまりなし。遺物は検出していない。

2号土壇跡 (第8図)

直径 1m、深さ0.15mをはかる円形プランを呈す。壁は幾分傾斜しながら立ちあがる。規模
底面は、ほぼ平坦面だが北側へ若干傾斜する。埋土は黒褐色土を基本土とするA層から成る。黄褐埋土
土塊を多量に含み、全く軟らかくしまりがない。遺物は検出していない。

3号土壇跡 (第8図)

1.5×1.25m、深さ0.25mをはかる楕円形プランを呈す。壁はゆるやかな傾斜で立ちあがる。規模
底面は、ほぼ平坦である。埋土は、A層から成りA₁、A₂層に細分される。A₁層は、やや粘性埋土
を有す黒色土を基本土とし黄褐色土塊を少量混入する。全く軟らかくしまっていない。A₂層は、
黒褐色土を基本土とし黄褐色土塊がやや多く混入する。炭化物粒子を若干量含む。軟らかくて
しまりがない。遺物は検出していない。

4号土壇跡 (第8図)

0.85×0.75m、深さ0.35mをはかる楕円形プランを呈す。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。規模
底面は、ほぼ平坦面である。埋土は、A層からなりA₁、A₂層に細分される。A₁層は、黒褐色土埋土
を基本土とし炭化物粒を少量含む。軟らかくてしまりなし。A₂層は、やや明るい黒褐色土を基
本土とし黄褐色土を粒塊状に少量含む。軟らかくてしまりなし。遺物は、検出されていない。

5号土壇跡 (第9図)

直径 1.2m、深さ 0.2mをはかる円形プランを呈す。壁は、幾分傾斜しながら立ちあがる。規模
底面は、ほぼ平坦面だが東側に若干傾斜する。埋土は、A層から成りA₁、A₂層に細分される。埋土
A₁層は、やや明るい黒褐色土を基本土とし炭化物粒を多く含む。軟らかくてしまりなし。A₂層
は、明るい黒褐色土を基本土とし黄褐色土を塊状に多量に含む。軟らかくてしまりなし。遺物
は検出されていない。

6号土壇跡 (第9図)

1.0×0.8m、深さ 0.4mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。規模
底面は、ほぼ平坦面である。

規模 7号土坑跡 (第10図)

埋土 0.95×0.7m、深さ0.25mをはかる不整楕円形プランを呈する。壁及び底面は、凸凹が著しくすり鉢状を呈す。埋土は、A層、B層から成る。A層は、やや粘性のある黒色土を基本土とし炭化物粒を少量含む。軟らかくてしまりなし。B層は、褐色砂質土を基本土とし黄褐色土塊を多量に含む。全く軟らかくてしまりなし。遺物は検出されていない。

規模 8号土坑跡 (第10図)

埋土 0.8×0.6m、深さ0.15mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、東～南～西壁はほぼ垂直だが、北壁側はゆるやかな傾斜で立ちあがる。底面は、凸凹が認められる。埋土は、褐色砂質土を基本土とし黄褐色土塊を多量に含む。全く軟らかくてしまっていない。遺物は、検出されていない。

規模 9号土坑跡 (第10図)

埋土 1.3×0.7m、深さ0.25mをはかる長楕円形プランを呈する。壁は、幾分傾斜しながら立ちあがる。底面は、若干凸凹が認められるが、ほぼ平坦面である。埋土は、A層から成りA₁、A₂層に細分される。A₁層は、暗褐色土を基本土とし黄褐色土を塊状に多量に混入し、炭化物粒を比較的多く含む。固く比較的しまっている。A₂層は、やや明るい暗褐色土を基本土とし黄褐色土を塊粒状に多く混入する。比較的固くしまっている。遺物は検出されていない。

規模 20号土坑跡 (第11図)

埋土 0.55×0.55m、深さ0.2mをはかる方形状プランを呈する。体部上半から口縁部を欠く土器を埋設する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがり底面は、ほぼ平坦面である。埋土は、A層と土器内土のB層から成る。A層は、暗褐色土を基本土とし黄褐色土塊、黒色土塊を混入する。軟らかくしまっていない。B層は、土器内土で全く軟らかくしまりのない黒褐色土である。

規模 10号土坑跡 (第11図)

埋土 1.45×1.25m、深さ0.2mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。底面は、平坦面だが斜面なりに傾斜する。埋土は、A層から成りA₁、A₂層に細分される。A₁層は、黒褐色土を基本土とし黒色土、褐色土、黄褐色土を粒塊状に混入し、炭化物粒を少量含む。軟らかくてしまりなし。A₂層は、黒褐色～暗褐色土を基本土とし黄褐色土を塊状に多量に混入する。全くしまりがなく軟らかい。遺物は検出されていない。

規模 11号土坑跡 (第12図)

埋土 1.05×0.7m、深さ0.1mをはかる楕円形プランを呈する。浅い皿状のピットで底面は斜面なりに傾斜する。埋土は、しまりのない軟らかい黒褐色土が堆積する。遺物は検出されていない。

12号土坑跡 (第12図)

西～南側の半分くらいを掘りすぎてしまった。推定で直径0.95m、深さ0.55mをはかる円形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、底面は平坦である。埋土はA～C層から成る。A層は、暗褐色土を基本土とし黄褐色土を粒塊状に多く混入する。軟らかくできていない。B層は、B₁、B₂層に細分される。B₁層は褐色砂質土を基本土とし、軟らかくしまりが無い。炭化物粒や焼土の小塊を含む。B₂層は、褐色砂質土を基本土とし黄褐色土を塊状に多く混入する。軟らかくできていない。C層は、壁際に堆積するもので明るい暗褐色土を基本土とする。黄褐色土の小～大塊がかなりの割合で混入し、全く軟らかくできていない。遺物は、A、B層から縄文の地文が施文された極小片が若干量検出している。

規模
埋土

13号土坑跡 (第13図)

1.3×1.1m、深さ0.7mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、幾分傾斜ぎみに立ちあがる。底面は、中央部付近が若干凹み加減となる。埋土は、A層、B層に分けられる。A層は、A₁、A₂層に細分される。A₁層は、黒褐色土を基本土とし黄褐色土を粒塊状に少量混入し、焼土の小塊を含む。A₂層は、焼土層で当土掘埋没の過程において投棄されたものと考えられる。B層は、B₁、B₂層に細分される。B₁層は、暗褐色砂質土を基本土とし黄褐色土を塊状にかなり多量に混入し、少量ながら炭化物粒を含む。比較的固いが全くしまっていない。B₂層は、B₁層よりも更に黄褐色土の割合が高くなる。遺物は、縄文を施文しただけの小片が出土しているだけである。

規模
埋土

14号土坑跡 (第13図)

0.65×0.5m、深さ0.1mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。底面は、多少の凸凹が認められるが概して平坦である。埋土は、黒褐色土を基本土とし暗褐色土、黄褐色土を塊粒状に混入する。炭化物粒子を少量含む。全く軟らかくできていない。遺物は検出していない。

規模
埋土

15号土坑跡 (第13図)

0.8×0.65m、深さ0.1mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、ほぼ垂直に立ちあがる。底面は、ほぼ平坦である。埋土は、暗褐色土を基本土とし黄褐色土塊を多く含む。軟らかくできていない。遺物は検出していない。

規模
埋土

16号土坑跡 (第14図)

0.95×0.75m、深さ0.2mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、底面からゆるやかな傾斜で立ちあがる。底面は、ほぼ平坦面を呈す。埋土は、全く軟らかくしまりのない黒褐色土を基本土とし黄褐色土を粒塊状に混入する。炭化物粒子を少量含む。遺物は、地文の縄文を施文した極小片が数点検出している。

規模
埋土

17号土坑跡（第14図）

規模
埋土

1.5×0.9m、深さ0.15mをはかる長楕円形プランを呈する。壁は、底面からゆるやかに立ちあがり、底面は、平坦面を呈する。埋土は、軟らかくてしまりのない黒褐色土を基本土とし黄褐色土を塊粒状に混入する。遺物は検出されていない。

18号土坑跡（第15図）

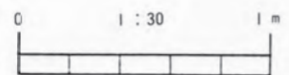
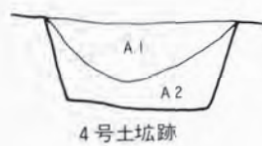
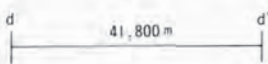
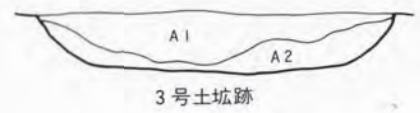
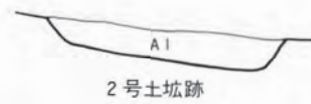
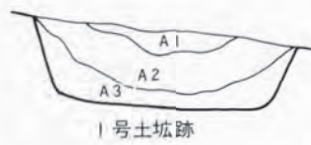
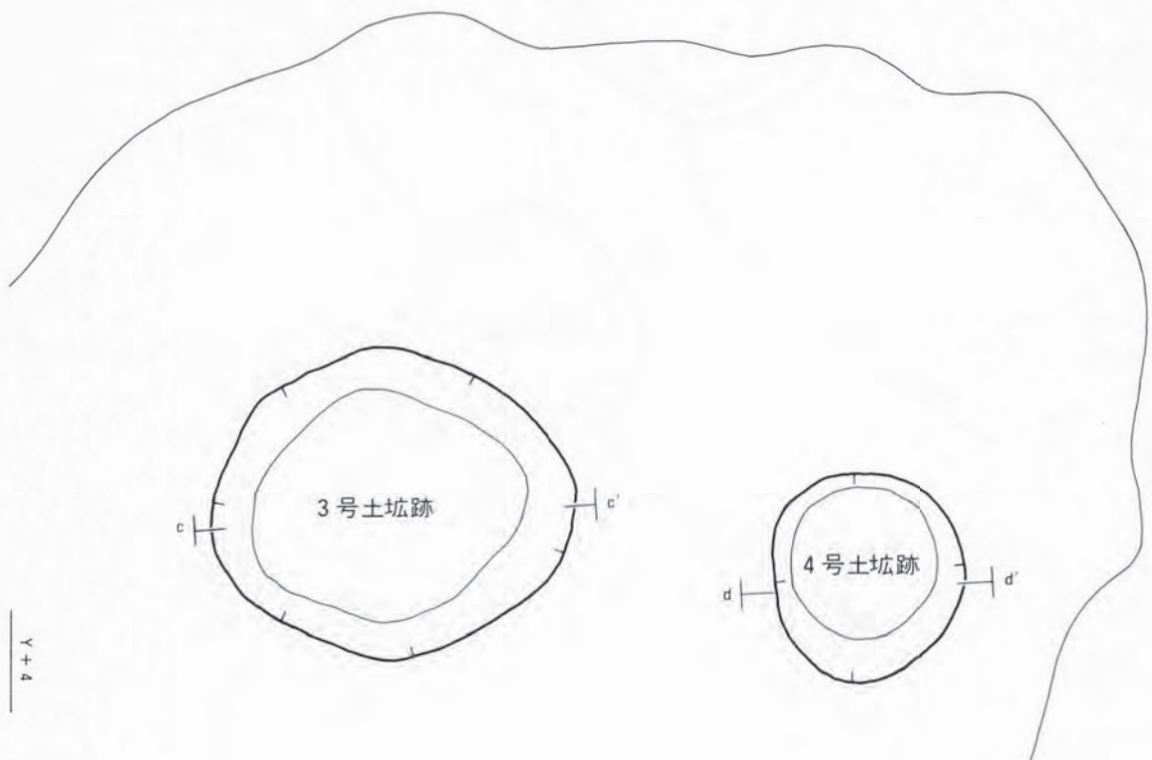
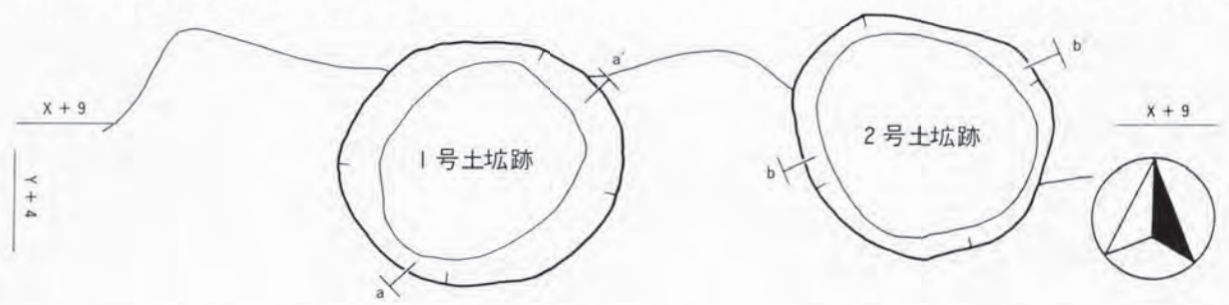
規模
埋土

1.3×1.2m、深さ1.3mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、底面からほぼ垂直に立ちあがりピーカー状を呈する。埋土は、A層～C層に大別される。A層は、A₁～A₃層に細分される。A₁層は、暗い褐色土を基本土とし黄褐色土を粒状に少量混入し、炭化物粒子を少量含む。A₂層、A₃層は、褐色土を基本土とし黄褐色土を塊粒状に混入し、特にA₃層中には多量に混入する。A₁～A₃層は、いずれも全く軟らかくしまっていない。B層は、B₁、B₂層に細分され、いずれも明るい褐色のかなり砂質の強い土を基本土とする。B₁層中には、かなり多量の炭化物粒子を包含する。B₁、B₂層とも全く軟らかくてしまりなし。C層は、底面全体を覆うもので若干粘性のある黒褐色土を基本土とする。炭化物粒子を少量含む。軟らかくてしまりがない。遺物は、検出されていない。

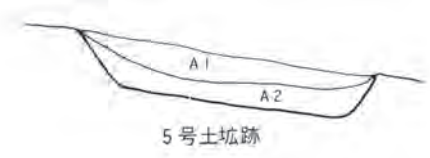
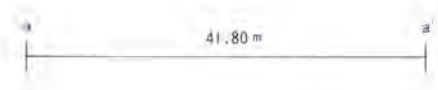
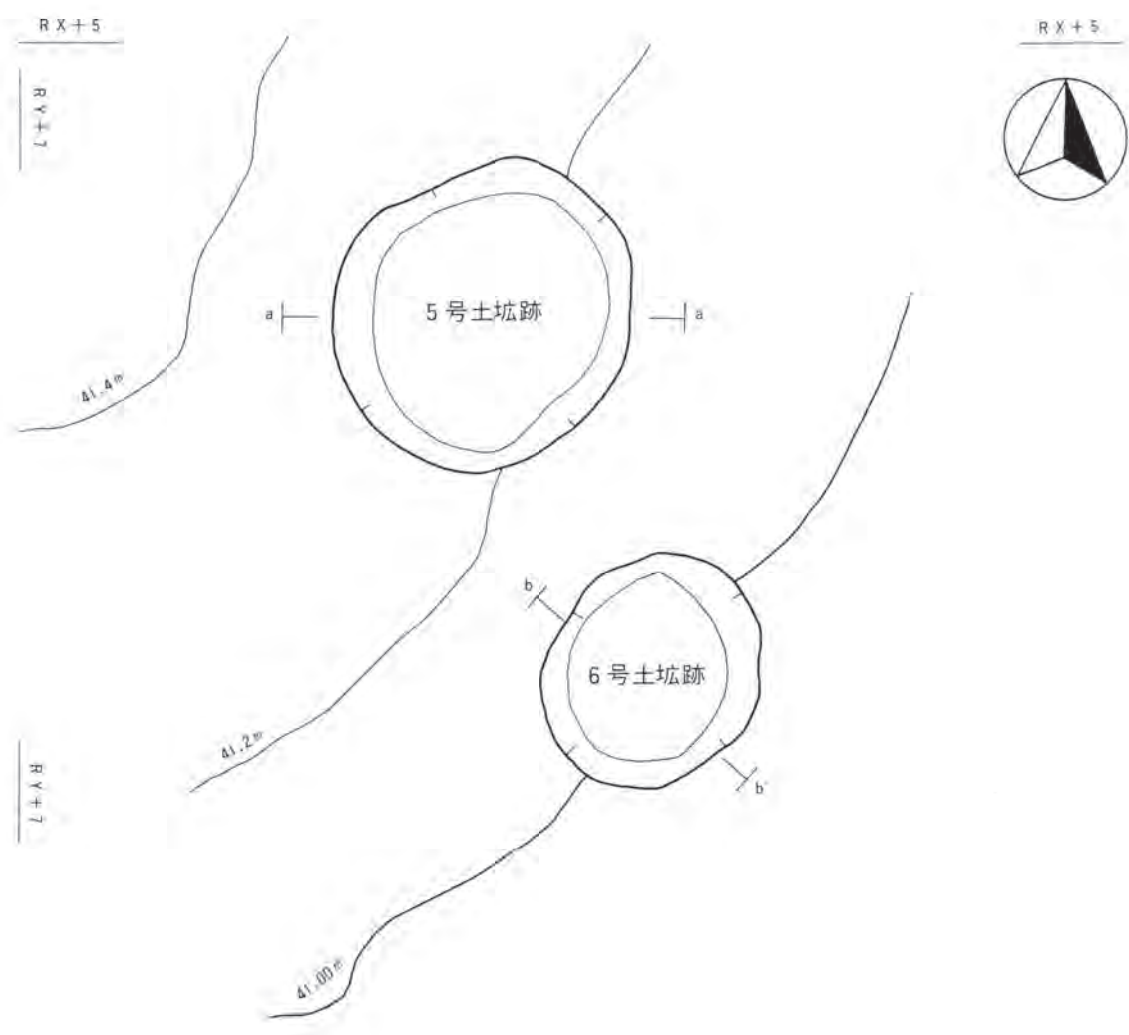
19号土坑跡（第16図）

規模
埋土

1.45×1.25m、深さ0.6mをはかる楕円形プランを呈する。壁は、斜面上部の方はほぼ垂直に、斜面下部の方は、ゆるやかに立ちあがる。底面は、ほぼ平坦面を呈す。埋土は、A層から成りA₁～A₃層に細分される。A₁層は、明るい褐色土を基本土とし黒褐色土を粒塊状にわずかに混入する。炭化物粒子を少量含む。比較的固くしまっている。A₂層は、暗い褐色土を基本土とし黄褐色土を粒塊状にわずかに混入する。炭化物粒子を少量含む。固くて比較的しまっている。A₃層は、褐色土を基本土とし黄褐色土を粒塊状に多量に混入する。全く軟らかくしまっていない。遺物は検出していない。



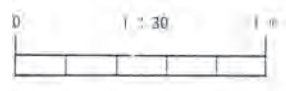
第8图 1号~4号土坛迹



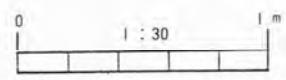
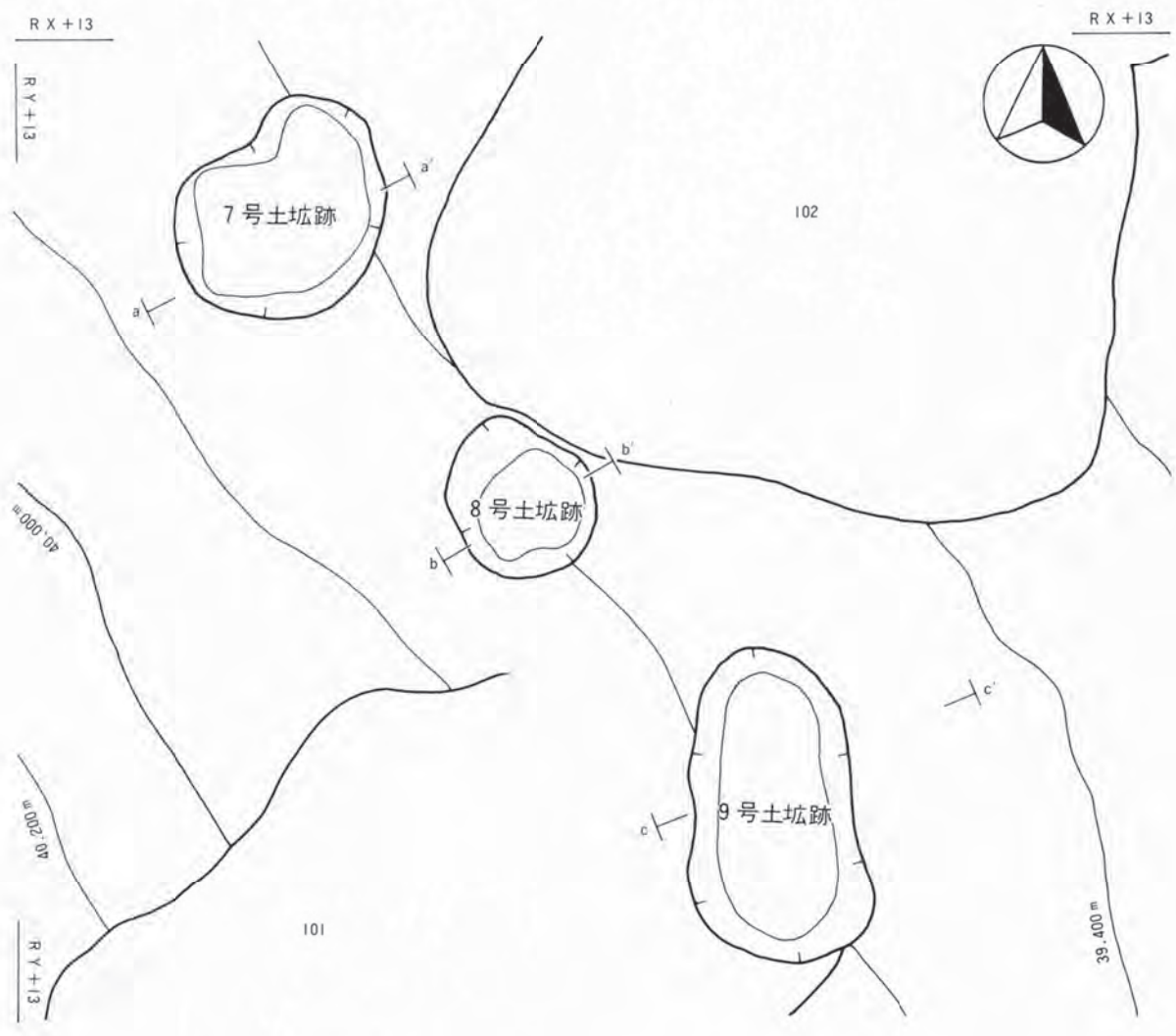
5号土坛跡



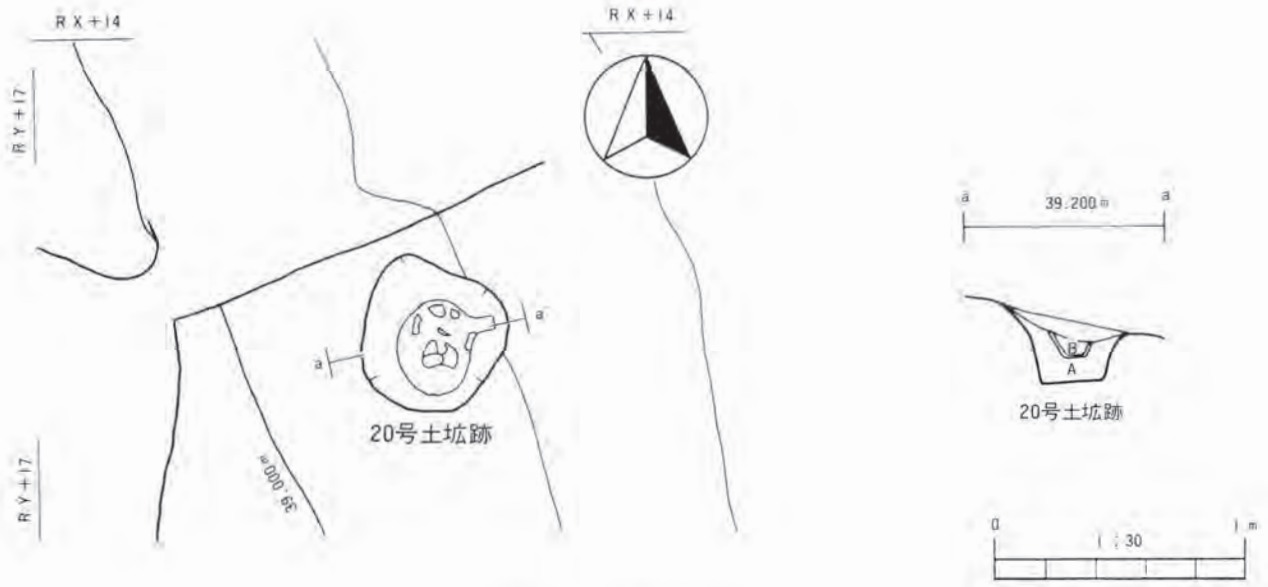
6号土坛跡



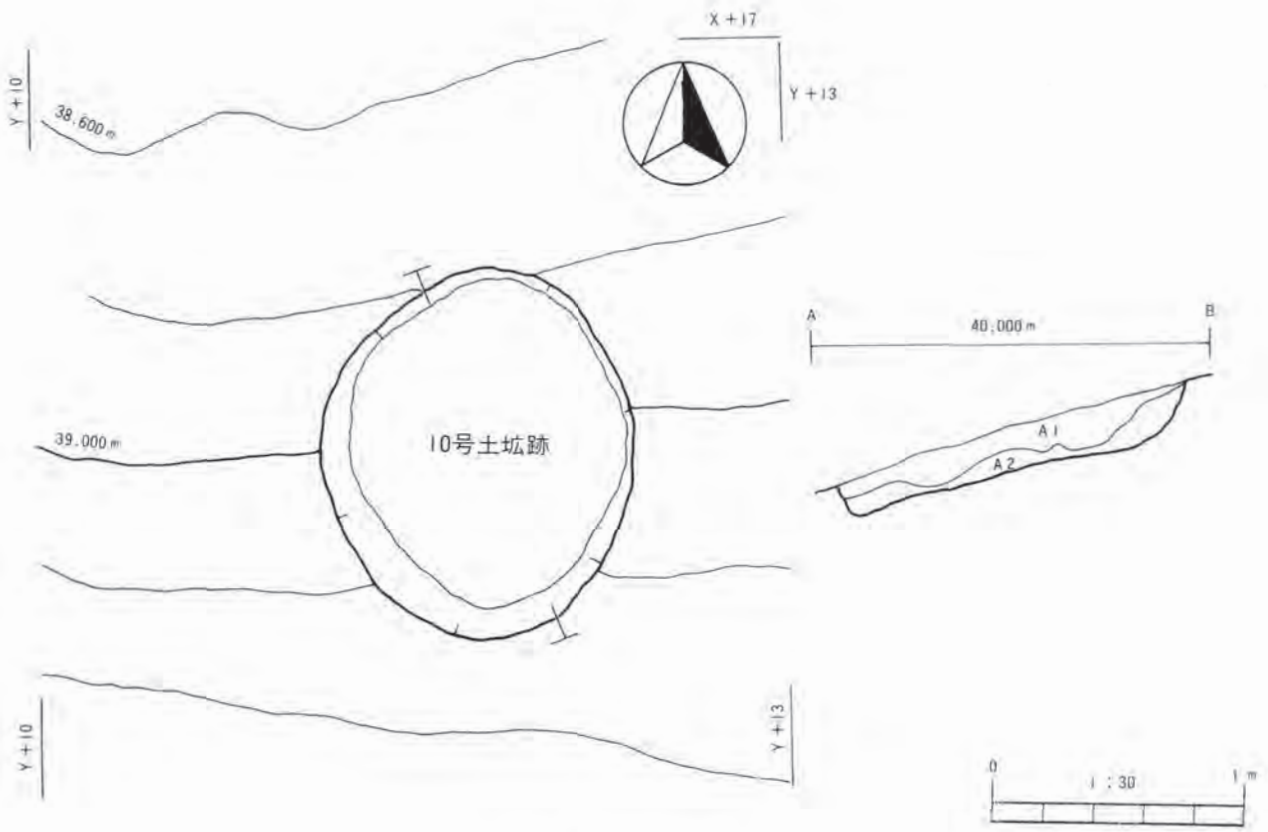
第9图 5·6号土坛跡



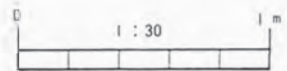
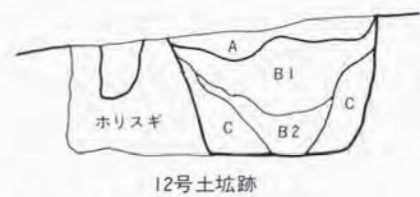
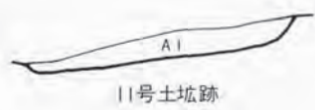
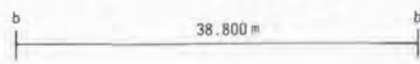
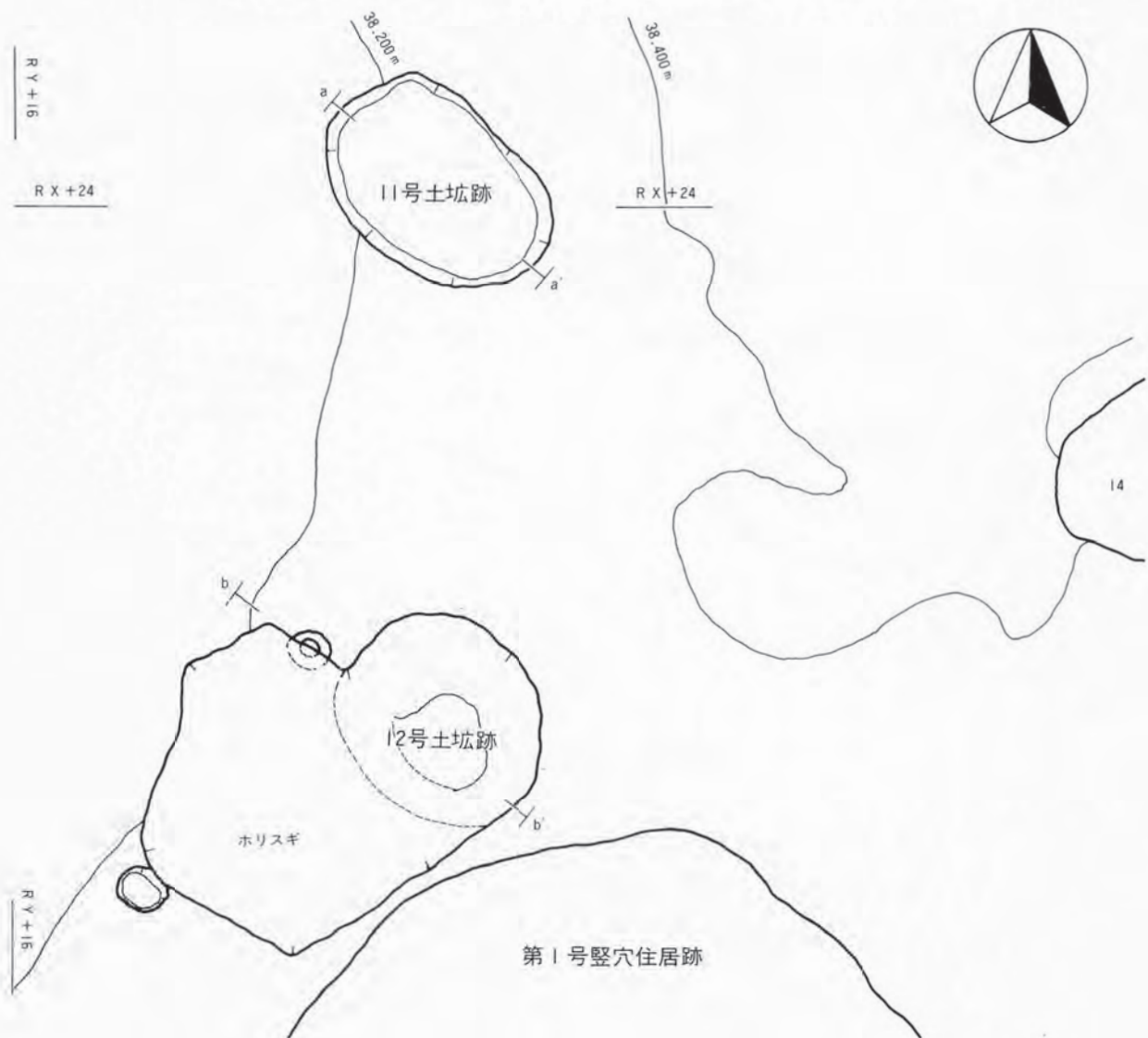
第10图 7号~9号土坛迹



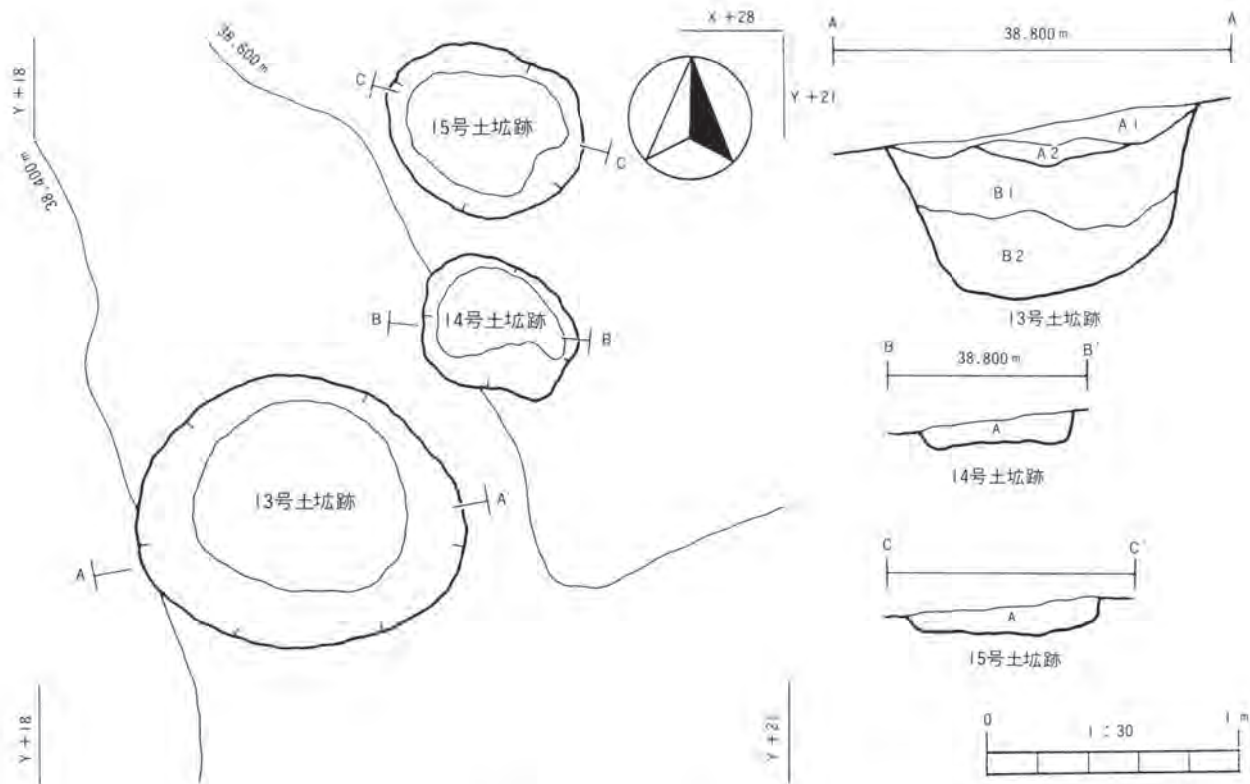
第11圖 20号土坛跡



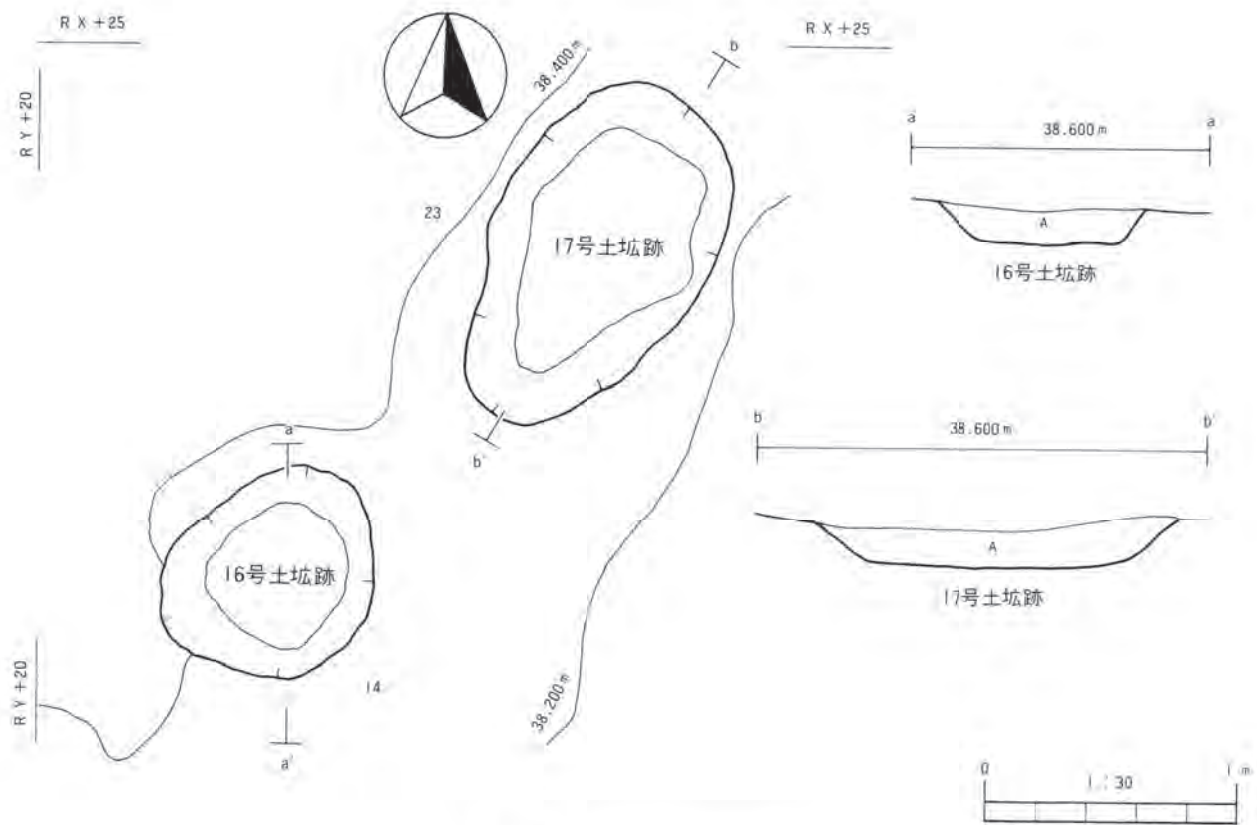
第11圖 10号土坛跡



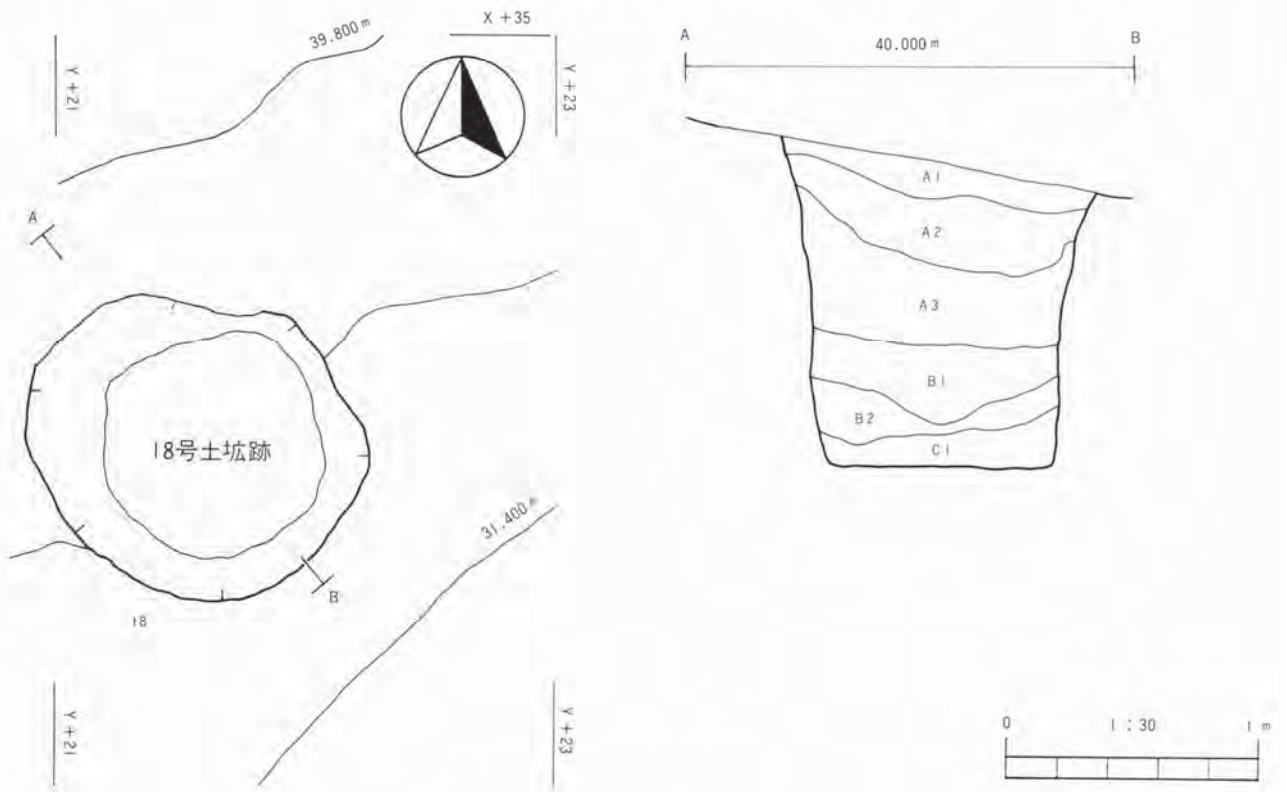
第12図 11号・12号土壇跡



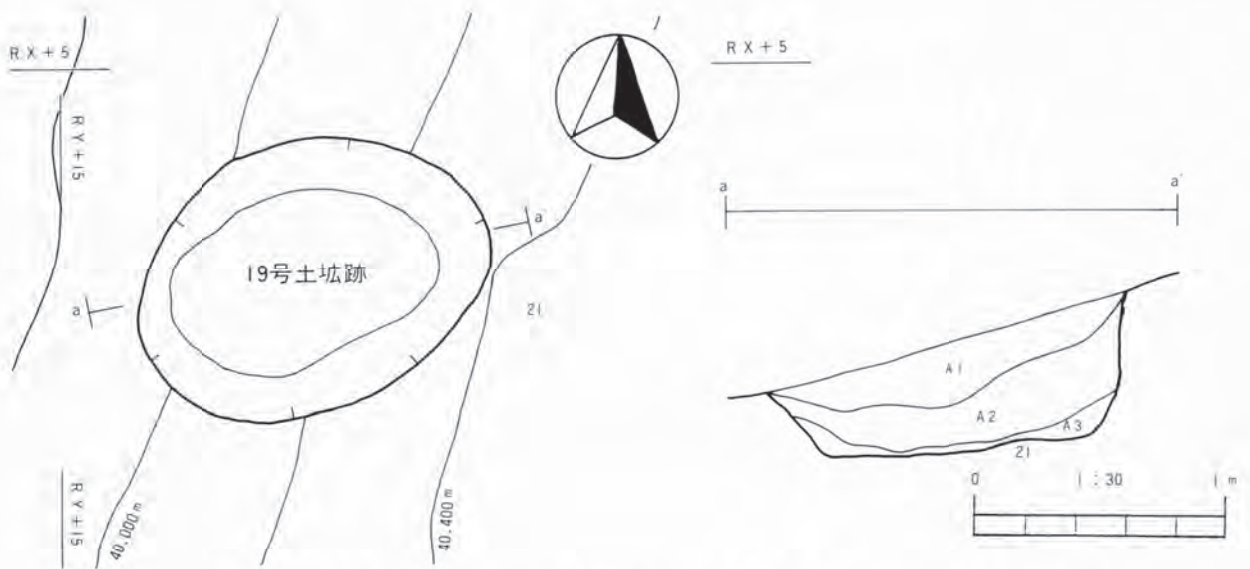
第13图 13号~15号土坛迹



第14图 16号·17号土坛迹



第15图 18号土坛迹



第16图 19号土坛迹

b. 平安時代の遺構・遺物

R A 03 竪穴住居跡 (第18図)

調査区内の低い方に位置する。当竪穴住居跡は、既に記したようにその大半部分が昭和56年(1981)度に精査されており(未報告)、遺構名称もその際に付けたものをそのまま使用した。

規模

平面形は方形を呈し、規模は一辺が4.0mをはかる。壁は床面から垂直に立ちあがり、壁高は0.1mを残し比較的掘り込みの深いものである。

埋土

埋土は大きくA～C層に分けられる。A層は、褐色砂質土を基本土とし黒褐色土を塊粒状に混入する。やわらかくて全くしまりがない。B層は、やや粘性を有す黒色土を基本土とし黄褐色土塊を少量混入する。炭化物粒子や土器片などを含む。C層は、やわらかく全くしまりのない褐色の砂質土を基本土とする層で、更にC₁～C₃層に細分される。C₁層は黄褐色土を粒粉状に多量に混入し、やや明るい褐色土を基本土とする。C₂層はやや暗い褐色土を基本土とし黒褐色土を混入する。C₃層は、炭化物粒子を含む。

床面

床面は地山の花崗岩を掘り込んだ平坦面で、非常に固い。また、東～北壁にかけては周溝が認められる。周溝は、幅0.15m、深さ0.1mをはかるものである。

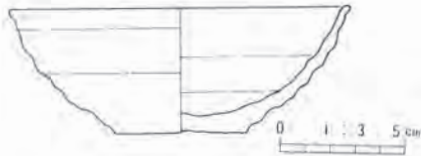
柱穴

柱穴及びピットは何個か確認したが、床面の大半部分を精査した過去の調査結果が未報告のため具体的な配置などは不明である。

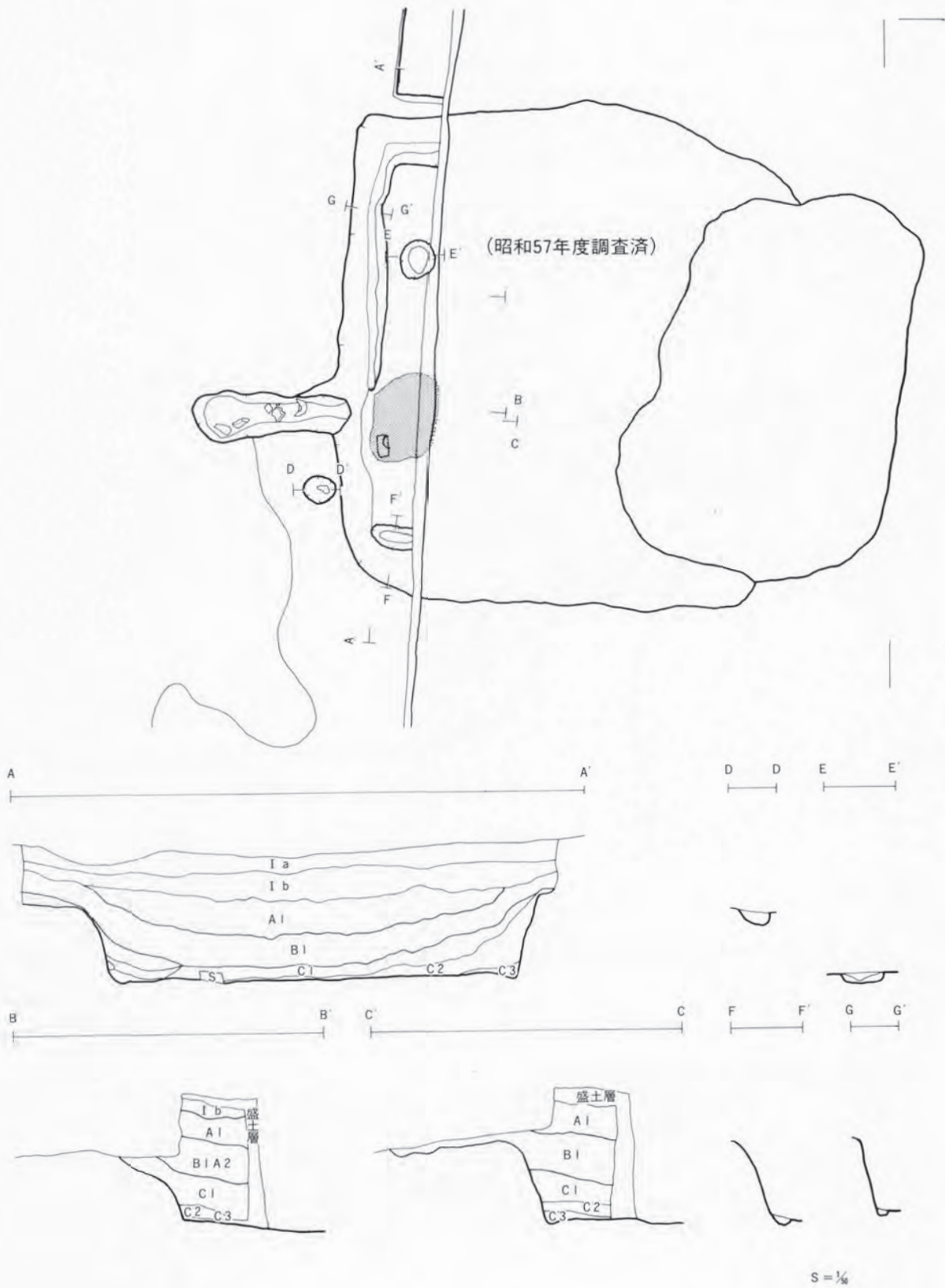
カマド跡

カマド跡は北壁のほぼ中央部に検出したが、大部分が破壊されており、わずかに焼土の拡がりと共にそれに伴う焼土の浸透層が確認できたのみで袖部などの痕跡は確認できなかった。煙道は長さ1.2m、幅0.45mをはかる。

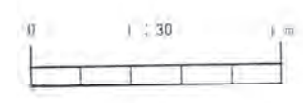
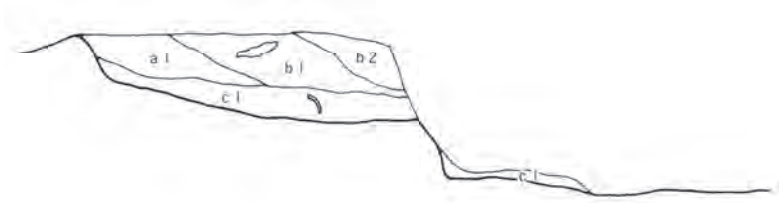
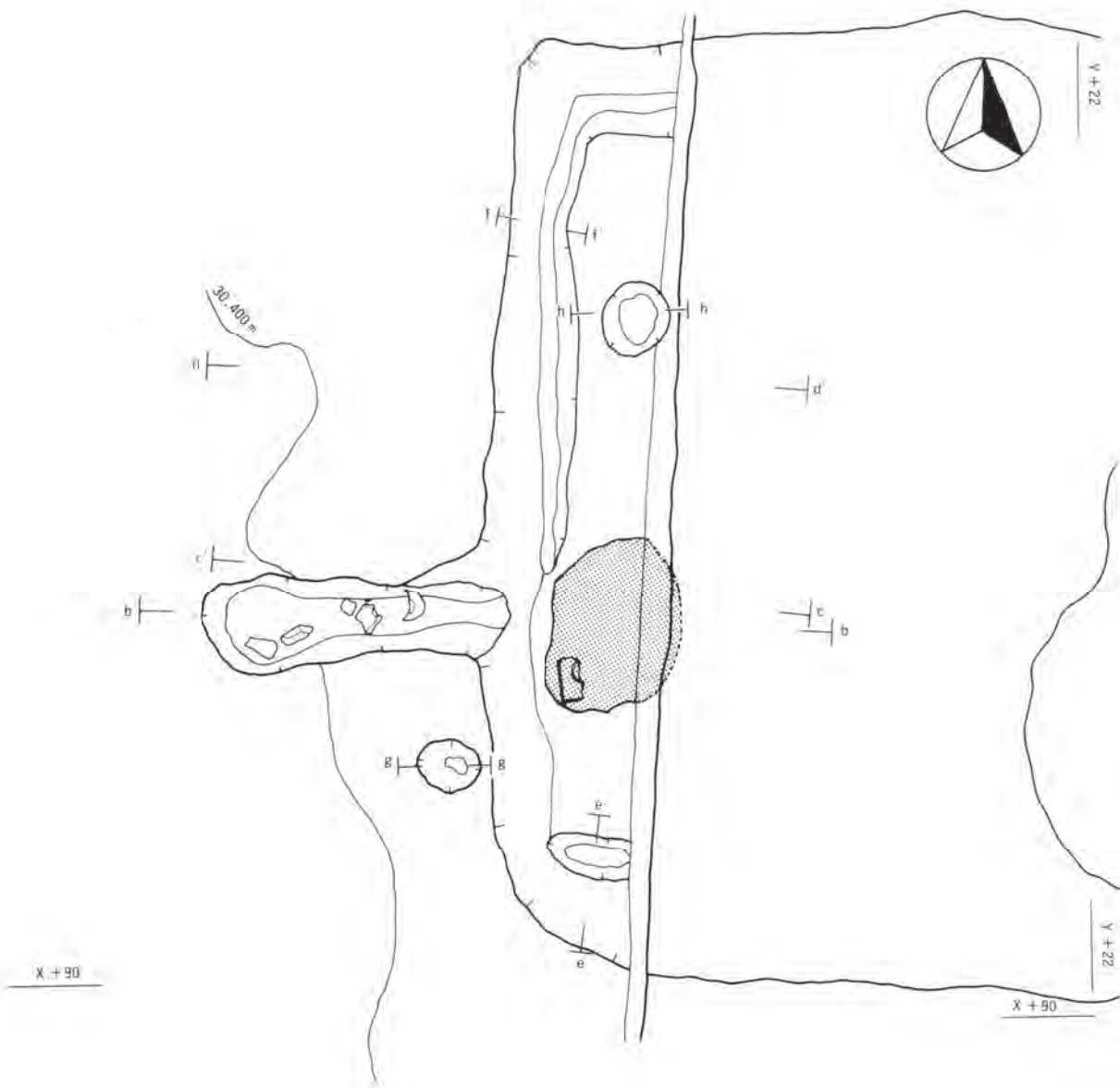
出土遺物はカマド煙道部埋土より坏及び少量の甕の体部片が出土した。



第17図 R A 03 竪穴住居跡出土土器



第18図 R A 03 竖穴住居跡



第19図 R A03 竪穴住居跡カマド

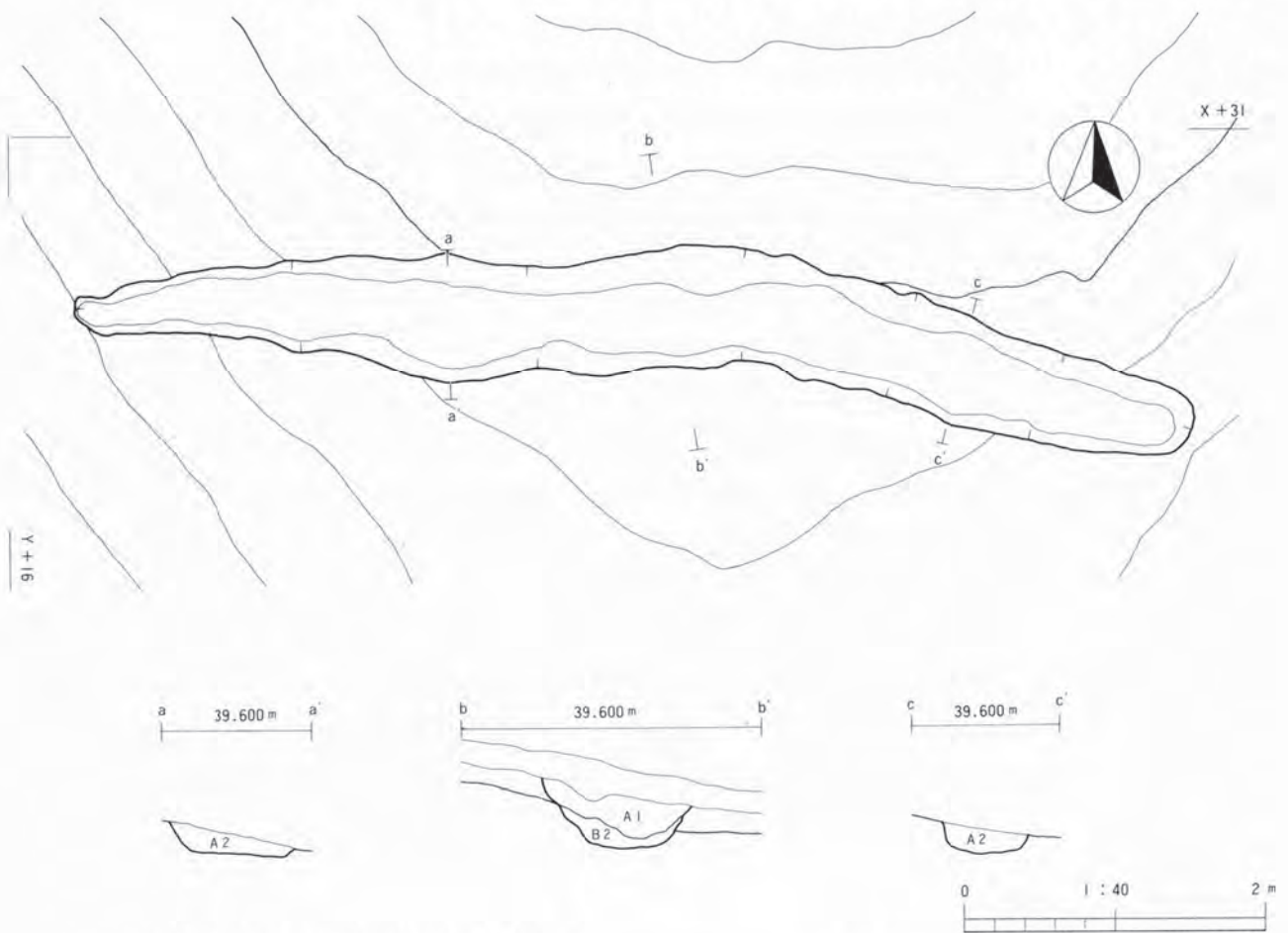
溝状遺構 (第20図)

尾根の最高所から下がった地点に位置する縄文時代の第1号竪穴住居跡の東側の高くなった所に位置する。元々は、南側に伸びる尾根(昭和56年度に調査)と東側に伸びる尾根の分岐点に相当する場所である。

南-北に走向し、全長 7.5m、幅 0.8m、深さ0.15mをはかるものである。壁は、溝底より比較的きつい角度で立ちあがり溝底は平坦で幅広い。

埋土は、黒褐色土を基本土とする層から成り、黄褐色土塊を比較的多く混入する。少量ながら炭化物粒子を含む。やわらかくしまりはない。

遺物は全く出土しなかった。



第20図 溝状遺構

III 調査のまとめ

泉町狐崎II遺跡の昭和63年度発掘調査の概要は、以下のとおりである。ここでは、その結果をもとに若干の考察を加えてまとめている。

(1) 縄文時代の遺構・遺物

今回の調査では、竪穴住居跡1棟の外、竪穴状遺構2、土壇跡20基を検出したが、以下、竪穴住居跡を中心にまとめている。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は、その所属時期を明確に把握できる遺物はほとんど出土しておらず、明確な時期は不明であるが、竪穴の構造的には円形プランを呈し床面中央部からやや北寄りに炉（地床炉）が存在し、柱穴が壁際に巡るように配されていることや北東壁側に埋襲施設を設けていることなどから縄文時代中期から後期にかけてのものと考えられる。

壁際に巡るように配されている各柱穴間の距離は、P₁～P₂間が0.9m、P₂～P₃間が0.8m、P₃～P₄間が1.0m、P₄～P₅間が0.85m、P₅～P₆間が0.8m、P₆～P₁₀間が1.9m、P₁₀～P₁₁間が1.0m、P₁₁～P₁間が0.75mとなる。最も広いのは、炉と反対側の南西側に位置するP₆～P₁₀間で逆に最も狭いのは、埋襲施設の存在するP₁₁～P₁間である。

埋襲

さて、一般的に埋襲は屋内、屋外に大別されるが、屋内のものについての特徴としては次のような事が言われている。

- ①縄文時代中期中葉から中期末にかけてのものが多い。
- ②廃棄された、ほとんど遺物のない住居跡にも残存している。
- ③竪穴の出入口部分に設けられているものが多い。
- ④埋襲状態には直立と倒立の2種に分けられ、原則的に1住居1個である。

以上のような特徴に基づき、その用途・性格については諸説が説えられているが、そのうち代表的なものとしては、

- ㊸貼蔵具説、㊹幼児葬棺・胎盤収納説、㊺住居建築儀礼に係る供犠埋納施設説。

以上の3つが知られているが、いずれにしても埋襲の土器内からその内容物を検出する事例がほとんどないため、不明確な点が多いようである。

ところで、埋襲施設を伴う竪穴住居跡は宮古市内では、昭和57年（1982）度に発掘調査を実施した崎山トロノ木I遺跡第1号竪穴住居跡においても、その出入口部に相当する箇所に埋襲を検出している（昭和63年度に報告書刊行済）。

泉町狐崎II遺跡で検出した竪穴住居跡の埋襲は、前述のとおり柱穴間の距離が最も狭い所に位置するが、これが出入口部に相当するものかは断定しかねるが、その可能性は考えられる。

縄文時代中期以降になると、竪穴住居の中央部に炉を設け、それが住居内のどちらかに偏りはじめ様々な施設がつくられるように、住居内における空間の在り方に特徴が出てくると言われているが、今回の調査で検出した竪穴住居跡は、このような観点からもひとつの資料となるものと思われる。

写 真 图 版



調査区景観



調査区(1)

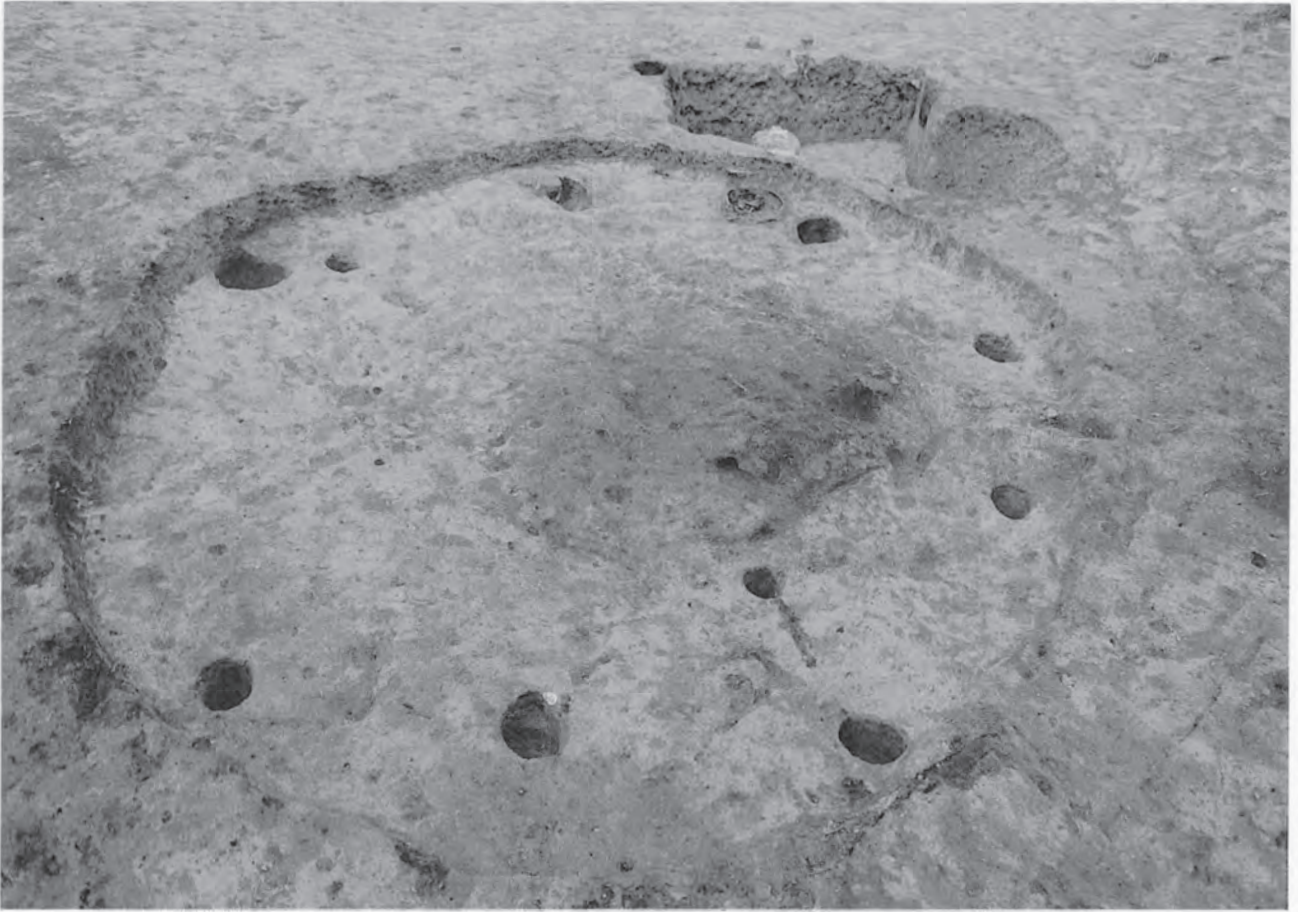
第2図版



調査区(2)



調査区(3)



第1号竖穴住居跡



第1号竖穴住居跡埋壘

第4图版



第1号竖穴住居跡埋甕断面



第1号竖穴住居跡炉跡



第2号竖穴状遺構



第3号竖穴状遺構

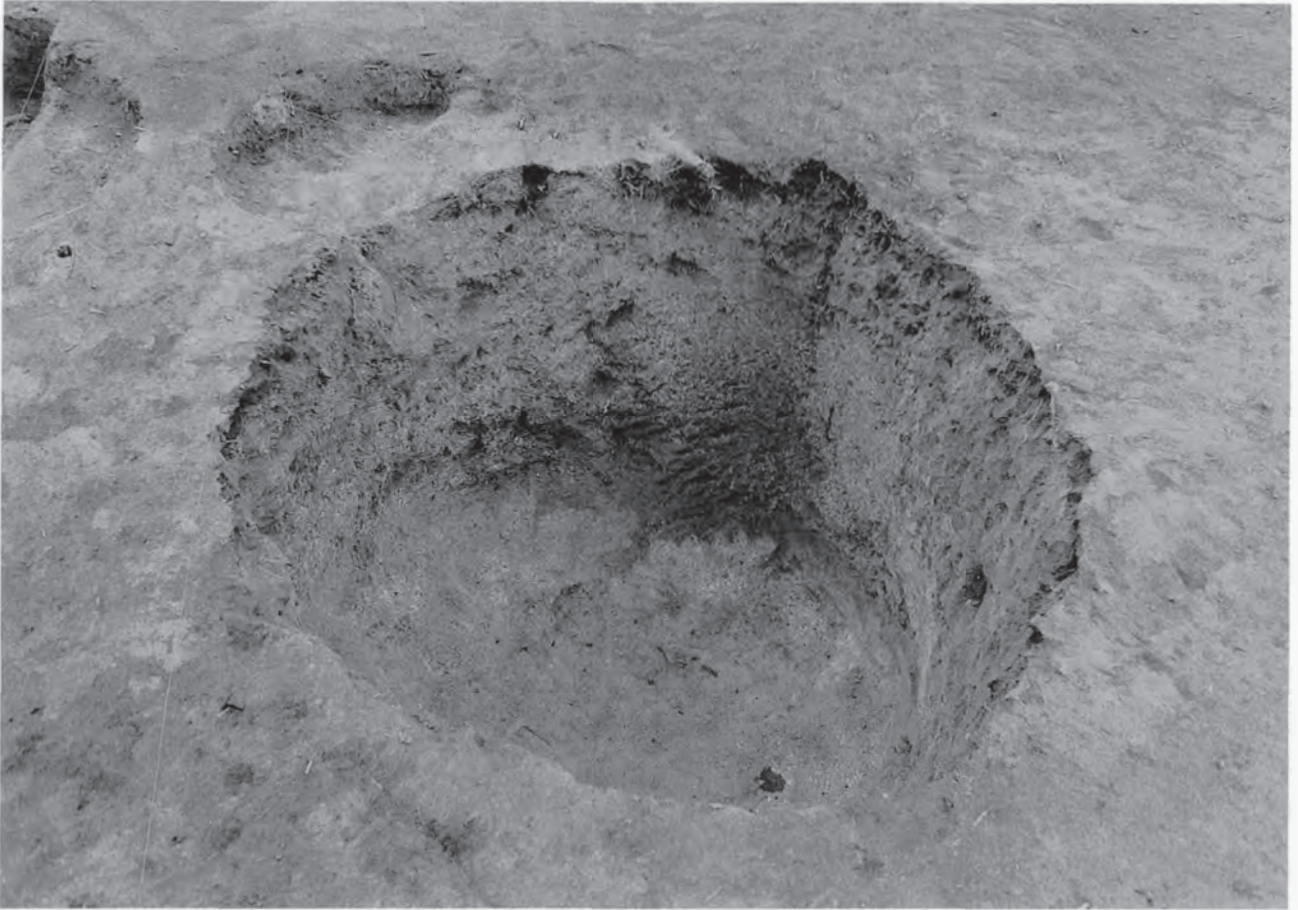
第6图版



18号土坛迹



18号土坛迹断面



13号土坛跡



溝状遺構

第8図版



R A 03 豎穴住居跡



R A 03 豎穴住居跡断面

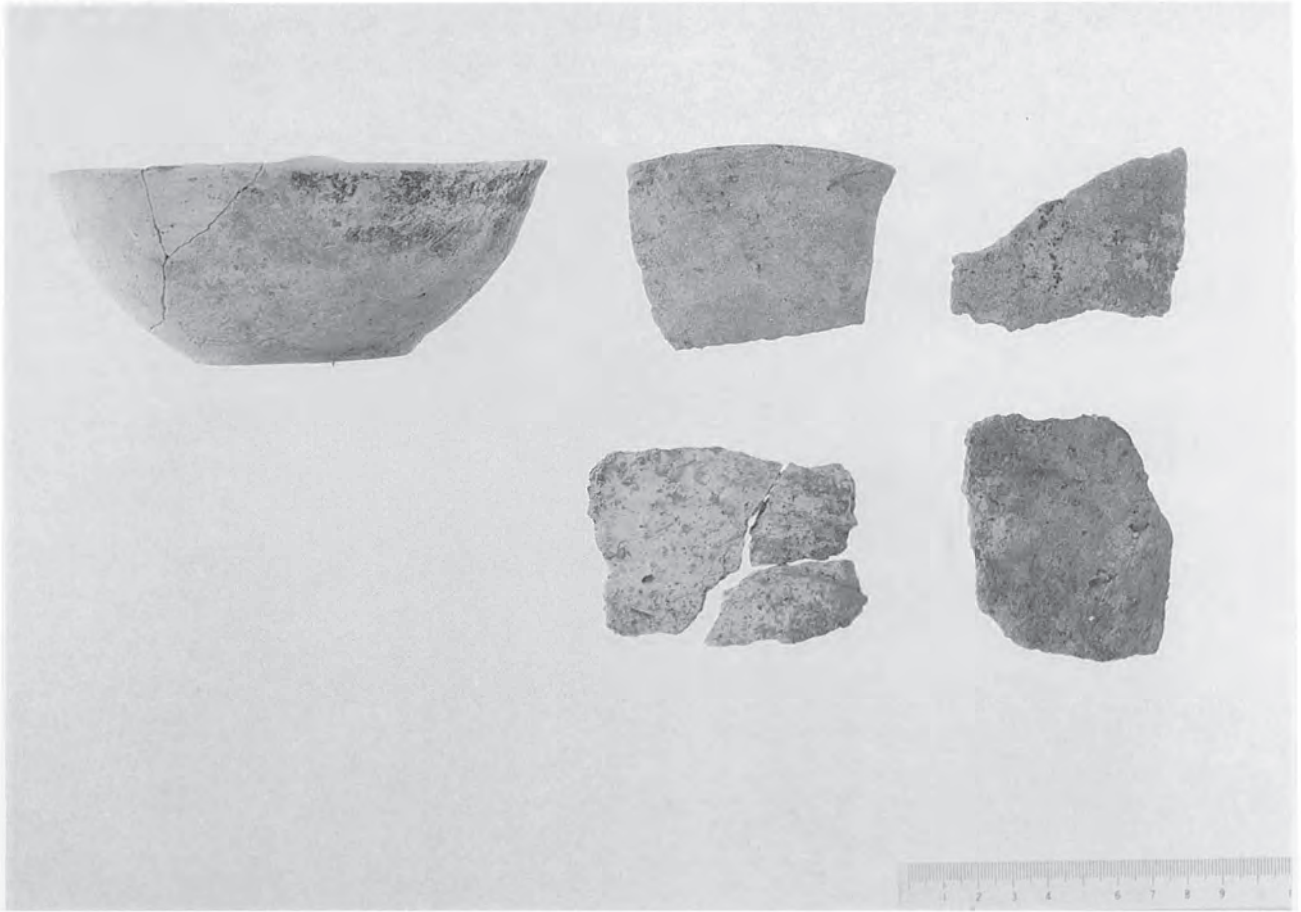


R A 03 竪穴住居跡カマド煙道



R A 03 竪穴住居跡カマド煙道土器出土状況

第10図版



R A 03豎穴住居跡出土土器



第1号豎穴住居跡埋藏土器

宮古市埋蔵文化財調査報告書19

狐崎 II 遺跡

—昭和63年度発掘調査報告書—

1989.6

発行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印刷 株式会社文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2